

轉住ニ付テ主張シ時機ニヨリ必ス自ラ証明
ラ為サ、ル契約又ハ財産等ニ関スル特別ノ
裁判管轄ニ至テハ相当ノ場合ニ從テ外國ニ
居住スル負債主ヲ内國ノ裁判所ニ召喚シテ
以テ足レリトスヘシ又本按ハ脅迫ニ陥リ易
キ事件ニ関シテハ特ニ注意シテ内國人ノ利
益ヲ主トシ通則ニ別テ特例ヲ設ケアリ即テ
夫ニ棄テラレアル独乙國婦人ノ離婚ノ訴求
〔本法第五百六十八條第二項〕後見人排除ノ訴
訟及、後見人再設ノ訴訟〔第五百九十四條第
六百六條〕其他推制執行手續ノ二三ノ場合第
七百四條第七百二十九條第七百八十條是レ

ナリ

〔第六解内國人〕独乙國臣民ニシテ或ル場合
ニ於テハ独乙國內ニテ裁判管轄ヲ受ルノ義
務ヲシト足メタルハ蓋新法ナリ即テ或人独
乙帝國外ニ住所ヲ有シ而テ本法第十四條乃
至第十六條ニ係ラス又特別ノ裁判管轄ニモ
係ラサル時ハ内國ノ裁判管轄ヲ被ラサルナ
リ近來ニ至ルマテハ一般ニ國家臣民タルノ
由縁ニ因テ享受スル被保護權ト裁判管轄上
ノ義務トハ相分離スヘカラサルモノト認定
シアリタリ然ルニ此原則ハ往々内國人タル
性質ノ解釈ニ於テ誤謬ヲ招キ曷クシテ而カ

モ現今ノ規則ハ即チ訴訟人ノ物件ノ管轄裁判所ニ服従スヘシトノ原則ニ適合スルモノト感悟シテ

〔第七解外國人〕 独シ國民ナラサル者ニシテ裁判所ノ法權ニ依レハ起訴裁判所管轄正口ニ住所ヲ有スル時ハ内國裁判所ニ訴訟セラルヘシ此規則ノ制定シテ以來初テ旧時ノ紛争殊ニ法朗西國ニ對シ恒ニ絶フルコトナカリシ葛藤ヲ防過シ得ルニ至レリ法朗西國ニ於テハ實際法國國民カ外國ニ有スル住所ヲ認ルルコトナク單ニ内國ノ住所權ヲ取ルナリ是レ就中數多ノ住所ヲ同時ニ有スル場

合一本条ノ第三解ニ於テ尤モ切要ナル關係アル所ナルヘシ

○始審裁判所管轄區内ニ住所ヲ有スル外人ノ婚姻上ノ事件ニ即チ其地

前項ノ原則ニ依レハ内國ニ始審裁判所ニ提出スルヲ得ルト虽モ法朗西國及ヒベルヂン國ニ於テハ頗ル其原則ヲ駁撃ス然リ而外國人カ婚姻上ノ事件ニ關シ起訴シ得ルノ義ニ付テ証左ヲ要ストナラハ則チ本法第百六十八條ニ就テ見ルヘシ蓋全条第一項ハ配偶夫ノ通常住所ニ依テ裁判管轄ヲ定メ還テ其第二項ハ特更ニ独シ國民タル配偶婦ヲ保護スルノ規則ナリ若シ第一項ノ趣義ハ果シテ内國民ノニ限ルモノト為ス片ハ第二項ノ明文ハ

挙示レ推カルヘキナラス乎又本法第五百九
十三条モ之ニ同シク内外國人ニ直ルモノト
解セサルヘカラサルナリ即ケ瘋癲者(訴訟法
実施条例第十条ニハ浪費者ヲ加フ)ヲ保護ス
ルニ付テハ内地ニ居住スル外國人ニモ及不
スモノト解釈スルハ蓋妥当ト云フヘキナリ
又内國人ノ外國人ニ係ル訴訟ノ手續ハ本法
ニ示定スルヨリモ尚ホ更ニ簡便ナラシメン
トノ動議(委員カラウセ氏ノ動議ハ遂ニ癸棄
セラレタリ)ニ対シテハ特別裁判管轄ノ規則
ヲ定メタルト及ヒ本法第六解ノ趣義トヲ以
テ満足セシメタリ独リ反訴ノ管轄ハ外國人

ニ対シテモ亦本法第三十三條ヲ以テ制限シ
且ツ証昏ニ関スル訴訟及ヒ為換ニ関スル訴
訟ニ付テハ本法第五百五十八條第一項ヲ以
テ全ク取除カレアルハ妥當ト云フヘカラサ
ルナリ或人其権理ヲ求ル場所ニ於テト復リ
推理ヲ取ラサル可カラサルヘシ(本法第十四
条第十五条ニ對スル第六解ヲ参照スヘシ)

第十四条 (普通管轄) (乙) 軍人ニ對スルノ条
軍人ノ裁判管轄ニ付テハ兵營所在地ヲ以テ其
住所ト認定ス
徴兵服役ノ為メ入營シ又ハ独立ニ住所ヲ一定

ニ能ハサル軍人ニハ此規則ヲ適用セス

第十五条 〔全上〕

独乙國內ニ一定ノ兵营地ナキ軍隊ニ属スル軍人ノ裁判管轄ニ付テハ其軍隊ノ独乙國內ノ最終ノ兵営所在地ヲ以テ住所ト認定ス

〔第一解理由ノ説明〕 本法第十四条乃至第十六条ハ被告カ自ラ相当ノ裁判管轄ヲ任意ニ選定シ得ス却テ職業又ハ官職ニ從テ定ムヘキ場合ノ普通管轄ヲ確定スル所ナリ
亦条ノ軍人ナル語ノ趣義ノ解釈ハ千八百七十四年五月二日頒布ノ帝國軍部法例第三十

八条ニ詳カナリ又亦条中第十四条ノ第二項ニ付テハ本法第二十一条第二項ヲ補助トシテ参照スヘシ〔本法第二十一条第六解ヲ参考スヘシ〕乃ケ此第十四条及ヒ第二十一条第二項ハ前述ノ軍部法例第三十九条第二項ニ適合ス

〔第二解制定ノ沿革及ヒ帝國軍部条例トノ關係〕 訴訟法実施条例ノ原案第十條即ケ方今ノ第十二条ニ付テハ數回ノ會議ヲ閲シ遂ニ第百二十一回ノ會議ニ於テ該第十二条中ニ廢止セシメサル帝國軍部法例第三十九条第一項ト本法第十五条トノ關係如何ヲ論議ス

ルヲ得タルナリ

即チ法例第三十九条第三項ニ於テハ戦備戒
嚴后其屯營ヲ引込キ又ハ永ク外國ニ駐成ス
ル軍隊ニ付テ其任意上候ニ争訟上ノ裁判管
轄ヲスヘカラサルナリ〔本法第十八条ノ第一解ヲ
参照スヘシ〕

〔第五解内外國人ヲ渾一ニスルノ理由説明〕

本条第一解ニ列載スル訴訟法各条及ヒ新定ノ
訴訟法草案等ニ依レハ則チ本条ノ原則ハ只
ニ被告タル者内國ニ住所ヲ有スル場合ニ限
レルナリ又北部独乙聯邦草案ニ於テモ亦其
第四十三条第四十四条ニハ内國ニ住所ナキ

時ハ居留地ノ管轄裁判所ニ起訴セシメ若シ
居留地不分明ナル者又ハ外國ニ住スル時ハ
其最終ニ居住セル内地ノ裁判ニ於テスルノ
義ナリ而テ外國ニ居住所ヲ有スル者ニ對シ
テハ即ケ

(甲) 財産権ニ関スル訴求ニ限り外國人ノ

居留地ノ管轄裁判所ニ

(乙) 外國居住前ニ起因スル推理義務ニ関

シ訴求スルニ限り最終ノ内地ノ居住

所ノ管轄裁判所ニ

起訴セシムルヲ得ルトアルナリ

然レ凡右ノ規則ハ頗ル煩雜ヲ免カレサルノ

ミナラス復タ確乎タル主義ヲ有セス是ニ於
テ予即ケ本按ハ良ク原則ヲ応用シテ以テ内
外國人間ニ裁判管轄ノ別ヲ立テス更ニ一歩
ヲ進メテ即ケ本条依ニ第十八条ノ場合ニ於
テハ普通裁判管轄ニ依リ其住所ノ内國外邦
ニ在ルヲ向ハス渾ヘテ被告カ居住スル場所
ニ就テ起訴セシムルヲ妥当ト認メテ判定シ
タルナリ故ニ独ニ内國〔本法第十八条〕ノ居苗
地ヲ以テ定ムル如キ補助普通管轄ハ只ニ被
告ハ更ニ住所ヲ有セス即ケ独ニ内國外共ニ
之レナキ場合ニ限り適用シ又取終ノ居住所
ニ拠ル即ケ被告ハ住所ヲ有セス且内國ノ居

苗地モ不分明ニシテ普通管轄ヲ確定シ難キ
場合ニ適用スレモ亦其取終ノ住所ハ内國ナ
ルト外邦ナルトヲ向ハサルナリ是ノ如ク本
案ハ原則ヲ活用シテ以テ現今ノ法義上ノ缺
欠ニ適合スヘキ萬國通法ノ進歩ヲ促カスノ
精神ニシテ而モ我國ノ利益ヲ害スヘキノ惧
ヲ顧ミサルナリ殊ニ本法第二十五条第二十
九条第二十四条ノ不動産又ハ一ノ内國裁判
所若クハ軍法裁判官ニ其都度必ス依頼シ又
ハアル場合ニ付テ依頼シ得ルノ國法ニ従ハ
レムルヲ定メタルナリ
或ル議員ハ現今外國永駐ノ軍隊ナキヲ以テ

本法第十五条ニ対スル軍部法例第三十九条
第三項ハ僅ニ開戦中ニ適用スヘキニ過キサ
ルヘシト主張セリ然ルニ内閣代理員ハ之ヲ
反駁シテ該条第三項ハ依然保存セラルサ
ルヘカラサル趣旨ヲ以テセリ
蓋該法例第三十九条ニ対スル理由説明ニ於
テハ軍人ニ係ル民事訴訟ニ付テハ新定ノ訴
訟法及ヒ裁判所編制法ヲ以テ規定セシコト
ヲ豫期シアルナリ然レ氏遂ニ然ルヲ得ス
テ止メリ
而内閣代理員ノ答弁ニ対シ更ニ駁議ヲ為セ
ル者ナリ遂ニ該法例第三十九条第三項ハ癸

停ニ帰セサルヲ以テ（本法実施条例第十三条
供ニ裁判所編制法実施条例第七條ヲ參照ス
ヘシ）
後未ノ通則ニシテ先キノ特法ニ相抵觸
セサルカ故ニ戦備戒嚴ノ為メ兵營ヲ引拂ヘ
タルニ非ス又外國ニ永駐スルニモ非ラサル
軍隊ニ関シテノミ即チ本条ニ拠ルヘキモノ
ト推定スヘキナリ而帝國ノ直屬地タル「エ
ラス」ロットリンゲン州ニ當時駐屯セル軍隊
ハ同州ニ屯營ノ在ルアレハ即チ第十四条ニ
拠テ可ナリ復タ「コイ」ンツラースタット
兵モ其邦若自轄ノ軍隊ヲ除ク外ハ同ク第
十四条ニ拠ルナリ

帝國軍部法例以前ニ編修セラレタル草案ニ於テハ相一致シテ外國永駐ノ軍隊ノ裁判管轄ニ付テ特ニ勅定法ヲ以テ規定スルノ意ヲ示シタリシ

〔第三解、独立軍人〕帝國軍部法例ノ第一解ヲ按スルニ

第三十八條 常備軍ニ屬スハキモ、ハ

〔甲〕平時編制隊ノ軍人即ケ

(イ) 士官、軍医及ヒ軍吏其任官ノ当日ヨリ以テ免官ノ時期ニ至ル

(ロ) 降伏軍人即ケ降伏ノ日ヨリ其終期又ハ降参議約ノ取消ニ至ル

(ハ) 隨意兵及ヒ新募生兵、軍部ニ於テ給養ヲ為スノ日ヨリ又一ケ年隨意兵ハ軍隊ニ現ニ編入セラレタル日ヨリ共ニ其常備軍服役ヲ終ルノ日ニ至ル

〔乙〕(イ) 非職ノ士官、軍医、軍吏及卒ノ現役ヲ命セラレタル者ハ其就職ノ日ヨリ以テ解任ノ日ニ至ル

(ロ) 凡ソ戦時ニ方テ兵役ニ徵發セラレル者ハ其徵發ノ命ヲ受ケ又ハ隨意吏及ヒ卒ニシテ前項ノ部ニ屬ヒサル者ハ其徵發ノ命ヲ受ケ又ハ隨意

ニ軍隊ニ参着編入ノ当日ヨリ以テ
解職ノ当日ニ至ル

〔丙〕軍部ノ文官ハ其任官ノ日ヨリ以テ解
任ノ日ニ至ル

第三十九条 軍人ニ対スル特別裁判管轄
ハ刑及ニ限ル但帝國法律ヲ以テ之ヲ定
ム

軍人ノ普通裁判管轄ハ其兵營所在地ノ
裁判所ニ屬スト虽モ持リ徵兵服役中ノ
者又ハ独立シテ住所ヲ定メ得ラル者ハ
財産ニ関スル訴訟ニ限り兵營所在地ノ
裁判所ニ屬ス

トアリ

而該法例第三章ニ付テハ本条第二解ニ於テ
約述ス

帝國高等商裁判院ニ於テ保險契約ニ関シ
戦地行商人ハ軍人ニ屬スルト否ナトノ問題
ニ付テ渾ハテ軍隊ハ加之戦地ニ於テニ從ヘア
リテ而一種ノ趣義ニ於テ軍隊ニ加美スル所
ノ戦地行商人ヲ直ニ軍人ト見做スハ各当ナ
ラスト説明シテリ同院判決録第八卷第七十
五号ヲ参考セヨ

前項説明ヲ為セル當時ハ未タ帝國軍部法例
ノ頒布ナラサリシトハ虽モ而カモ該法例第

三十八条ノ趣旨ハ右ノ説明ト相抵触スル所
ナキナリ

軍吏ノ字義ニ付テハ千八百七十二年度ノ帝
國布告彙集ノ目錄ニ明定シアリ尚ホ本法第
十六條第六解ニ就テ觀ルヘシ
抑此第十四條ハ只ニ裁判管轄ヲ規定スルモ
ノニシテ即ケ例ヘハ身分ニ関スル事件ノ如
キ民法上ノ住所ニ付テノ結果ニハ毫モ影響
ヲ為サ、ルヘシ

又帝國軍部法例第三十九條第一項ニハ軍
ノ民事訴訟ニ對シ特遇ヲ享受スルノ例ヲ舉
示シテラサレハ即ケ全法例第三十八條ニ於

テモ亦他ノ場合ニ在テハ特遇ヲ被ムル例ハ
ハ退隱士官ニシテ正服着用ノ特許ヲ被ムル
如キ部類ノモノヲ特示セサルハ宜ハナルヘ
シ

前項ト同一ナル趣義ニ原キ本條及ヒ軍部法
例第三十九條ハ單ニ普通裁判管轄ノミヲ示
定ス從テ特遇ノ裁判管轄ハ之ヲ許サ、ルノ
意ニシテ而リモ本法第二十一条以下ノ特別
裁判管轄ニ付テハ規則ハ軍人ニモ適用スル
ハ論ヲ俟タス

本法第十四條第二項ノ例外規則及ヒ帝國軍
部法例第三十九條第二項ノ末段ニ付テハ本

法第二十一条第六解ヲ参照スヘシ

〔第四解外國ノ軍人〕 此第十四条及ヒ第十五

条ノ趣義依ニ語勢ニ於テ只ニ独シ國軍人ニ

對スル規則ナルコトハ顯著ナリ而外國人ニ

シテ治外法權〔裁判所編判法第十八条乃至第

二十一条〕ニ帰レアラサル限リハ其軍人ナル

ト否ラサルトシ向ハス渾ヘテ本法ニ扱ラサ

ルヘカラサルナリ

〔第五解独シ船艦〔甲〕軍艦〕 千八百七十二

年六月二十日頒布ノ独シ帝國軍部刑法ハ其第百

六十二条以下ニ依リ此規則ヲ軍艦ニモ適用

スルモノニテ即ケ同法ニ軍人ト称スル科目

中ニ帝國海軍ヲモ包摂セシメタリ今同刑法

第百六十四条ヲ抄出セシニ即ケ曰海軍ニ付

テ戦備トハ即ケ船艦ノ戦装ヲ為シタルヲ云

フ又各船艦ノ内地河海ヲ距テ单航スルモノ

ハ渾ヘテ戦装ヲ為セルモノト同視スヘシ但

陸上ニ在ル水兵ノ戦備ハ此法律ニ於テ陸軍

人ト同一ナル場合ヲ要ス

右刑法依ニ帝國憲法第五十三條ニ照ラシテ

千八百六十七年十一月九日頒布シ遂ニ帝國

法律ニ採用セラレタル兵役義務條例第二条

以下及ヒ第十三条以下ニ於テハ本法第十四

条第十五条第三十九条及ヒ帝國軍部法例第

三十九條第三項〔上〕第三解ヲ見ヨ一ヲ帝國海軍部ニモ適用スヘキ義ヲ明クセリ即ケ内國海岸ヲ距テ開航ノ役ニ就ク軍艦ハ勅宣ニ因リ争訟ヲ裁判スルノ権理ヲ実行スルヲ得ルナリ

軍艦ノ停泊地ヲ以テ其屯駐地及ヒ警備屯成地ト認メ得ルナリ〔帝國官吏條例第百二十一條ヲ參照スヘシ〕

又海軍歩兵ニハ一定ノ屯營所アリ〔又海軍ニ吏ニ付テハ本法第十六條第六解ヲ參考スヘシ〕

必竟本法第十四條第十五條及ヒ帝國軍部法

例第三十八條第三十九條ヲ制定スルニ方テハ軍艦商船ニ関シ之ヲ度外ニ措キタルハ敢テ掩フヘカラサルノ成蹟ニテ實ニ遺憾ニ堪ヘサルナリ然レモ本法草案按ハ他ノ場合ニテ往々軍艦ニ関シ明示スル所之レアリテ持リ爰ニ之ヲ明示セサルモ必スヤ内國船艦ニ適用スヘキハ論ヲ俟タス即ケ本法第百五十八條第三百四十三條第七百十五條〔六〕〔七〕第七百四十九條〔六〕〔八〕及ヒ其第五項ヲ參觀スヘシ

〔二〕商船ニ付テハ商法第四百五十五條ニ於テ規定ス即ケ船主即ケ航海ヲ業トシテ賃料ヲ収獲スルニ供スル船舶ノ所有主ナリ〔第四百

五十条ツルモノハ自身ニ関スルト其船舶若クハ運賃ニ関スルトノ別ナク内地海港即裁判所ニ起訴セラル、ヲ得〇内地海港即登記港地トハ商法第四百三十五条(三)ニ依リ其港ヨリ開航シテ營業スヘキ地ヲ云フモノニシテ各独シ商船ハ必ス此港地ヲ一定シアラサルヘカラス〔高法第四百三十二条第四百三十五条ヲ参照スヘシ〕
此第四百五十五条ノ規則ハ亦船ノ其有者ニモ通用ス〔高法第四百七十五条〕然レ氏此裁判管轄ハ持定ノモノナラサルヲ以テ亦法第三十一条ニ照シ原告ニ選定ノ權アリ

又商法第七百六十四条ニ依レハ船ノ債主其抵当權ニ付テ訟求スル時船長ヲ登記港地ノ裁判所ニ訴フヲ得ル、ヲ茲ニ示サ、ルヘカラス
之ニ反シ船長(船長)〔海員條例第二条高法第四百七十八条〕水夫軍艦乗組士官及ヒ卒〔高法第五百二十八条海員條例第三条〕ノ裁判管轄ニ付テハ其他ノ規則ヲ定メアラス独リ海員條例第五百五条及ヒ商法第五百三十七条ヲ以テ水夫ノ船長ニ対スル訴訟ハ之ヲ他ノ裁判所ニ起訴スルヲ許サス必ス其登記港地ノ裁判所ニ訴ヘサルヘカラサルノ規則ヲ定メア

リテ而高等商賣裁判院ハ之ヲ是認シテ裁判
シタル実例アリ

此海上法ノ規則ハ本法実施条例第十三条ニ
於テ其有効ナルヲ示シ且會議ニ於テモ之
ヲ確認シタリ

裁判所編判法第二十三條(三)ニ依レハ船客ト
船長トノ間ニ争フ一定ノ訴訟ハ其價額ヲ同
ハス乗船地ノ治安裁判所ニ屬セシム

是等ノ規則ノ不完全ナルヨリ遂ニ運河船ノ
所有主及シ其船長水夫保ニ商船ノ所有主ニ
對シテハ此普通管轄特別管轄ニ付テノ通則
ヲ適用セサルヘカラス然レ凡是レ甚タ不便

ヲ感スヘシ乃チ商船ノ船長水夫ニシテ數年
間ノ航海ノ為メ異郷ニ飄泊スルモ尚ホ必ス
其本國住所地ノ裁判所ニ於テ推理ヲ伸暢セ
サルヘカラレハナリ

〔第六解外國ノ船艦〕是ニ関シテハ裁判所編

判法第二十三條(二)ニ於テ外國ノ船長ニ係ル

事項ヲ定メアルノ外ハ帝國法律ニ於テ別

規定シラス(上)第五解ヲ參照スヘシ(蓋内

外國人ヲ同等視スルノ原則ニ據リ本法第十

三條第五解〔外國軍艦及シ外國商船ノ所有主

乘組士官水夫〕裁判所編判法第二十三條(三)ノ

場合ヲ除キ〕ニ對シテハ只本法ノ規則ニ准據

レ独乙國ノ裁判所ニ起訴スルヲ得ルナリ一本
法第十三条第七解ヲ参照スヘシ然レモ此規
則ハ既ニ差押ニ関スル特別裁判管轄ノ条ヲ
刪除シ且本法第十八条第二十四条ノ文義領
ル制限レアルカ為メ独乙人ハ施行地即チ其
執行ヲ豫期シ難キ地ニ於テ敢テ権理ヲ請求
セサルヘカラサルノ要迫ニ隔ルカ如キ甚メ
不妄当リ觀アリ

第十六条

〔普通裁判管轄〕一定ノ独乙官吏

ニ対スニ対スルノ条

治外法權ヲ享有スル独乙人又ハ外國駐紮ノ独

乙帝國若シハ各聯邦ノ官吏ノ裁判管轄ニ付テ
ハ其産地ニ有レシ住所ヲ以テ現住所ト認定
ス但是如キ住所ヲ有セザリシ者ハ其産地ノ首
府ヲ以テ住所ト定ム若シ其首府數多ノ裁判所
管轄區ニ分タレアル時ハ司法内政上ノ通則ニ
依テ之ヲ定ム

公選領吏ニ対シテハ此規則ヲ適用セス

〔制定ノ沿革〕各草案ハ本条新加ノ第二段第

三段ヲ除クノ外悉ク相符合セリ而國議院委
員會ノ第一讀會ニハ異議ナク採用セラレシ
リレモ第二讀會ニ於テ赴任ノ時ニ居住セル
住所ト定メントノ動議アリタレ氏遂ニ廢按

ニ屬セリ

〔第一解理由ノ説明〕 蓋本条ハ其帝國官吏ニ
關スル所ハ千八百七十三年三月三十一日頒
布ノ帝國官吏条例ト著シク相符合スヘシト
虽氏而カモ治外法權享受ノ独乙人ト外國駐
紮ノ帝國若クハ聯邦ノ官吏トノ別ヲ立テア
リ夫レ治外法權享受ノ独乙人ハ独乙國ノ内
外ニ論テク其產地外ニ住所ヲ有シ得ルニ乃
チ治外法權ニ係ル者トハ憲法第十條ニ依リ
又ハ独乙各聯邦間ニ於テ相駐紮セシムル差
遣公使ヲ云フ又外國駐紮ノ官吏トハ例ヘハ
關稅同盟委員トシテ心ウキヤンボウルグ大公

國ニ差駐スル吏員ノ如キラ云フナリ公選領
事ニハ千八百六十七年十一月八日頒布ノ帝
國領事官条例ノ第七條第九條ヲ参照スヘシ
本条ヲ適用セサルナリ
本条ニ奉クル輩ニ付テハ其產地ニ有セシ住
所ヲ以テ裁判管轄地ト定メ又バイルン國訴
訟法第十三條第一項オルデンボウルグ國全
法第十三條ハノール國全法第六條バデン
國全法第十九條ニ於ケルト一般ニ首府ヲ以
テ住所ト認定スルハ即ケ本則ニアラス只ニ
止ラ得サルニ出ルノ特例ナルナリ若シ首府
數号ノ裁判所管轄区ニ分ツレアルハ猶ホ

バイルン國訴訟法第十三条第二項ニ定ムル
如ク其管轄地ト定ムヘキ住所ヲ司法内政上
ノ通則ニ拠テ認定スヘキナリ又帝國官吏条
例第二十一条ニハ官吏ニシテ独ニ國內ニ産
地ノ之レアラサル者ニ付テ示定シテ即ケ
此場合ニハ其普通裁判管轄ハ「ベルリン府市
府裁判所」ニ屬スルモノトナセリ

〔第二解帝國官吏〕上ニ掲タル帝國官吏條例
第二十一条ノ明文ニ曰

外國ニ駐在スル独ニ帝國官吏ハ其産地ニ有
セシ本屬ノ裁判管轄ヲ保有ス若シ其産地ニ
本屬ノ裁判管轄ナキ場合ト産地ノ屬スル首

府ヲ以テ裁判管轄地ト定ム但産地ヲ有セサ
ル時ハ「ベルリン府市府裁判所」ニ屬セシム又
首府数多ノ裁判所管轄ニ別タレアル時ハ
其管轄スヘキ裁判所ヲ司法内政上ノ通則ニ
依テ定ムモノトス

公選領事ニ對シテハ此規則ヲ適用セス
此明文ト本条トヨリシテ左ノ結果ヲ顯出ス
ハシ即ケ

〔甲〕帝國官吏ニシテ勤仕上ノ住所ヲ独ニ國內
ニ有シ而カモ治外法權ヲ享受セサル者ナレ
ハ本法第十二条第十三条ニ依リ其住所ヲ以
テ普通裁判管轄地トナス

〔乙〕其勤仕上ノ住所独シ國外ニ在ル時ハ產地ニ有レシ普通裁判管轄ヲ継続シテ之ヲ保有ス產地ノ裁判管轄ヲ有レサリシ者ニハ首府即ケ司法内政上定メタル所產地ノ首府ヲ裁判管轄地ト定メ独シ国内ニ產地ナキ者ハベ
 ルリシ府市府裁判所ノ管轄ニ屬ス而向來ハ此市府裁判所ニ換用スルニベルリシ府治安裁判所ヲ以テスヘシ若シ数号ノ治安裁判所アル時ハ本法第十六条第二十一条ニ於ケルト一般ニ司法内政上其一ヲ指定スヘキナリ
 元來始審裁判所ニ屬スヘキ事件ニ付テハ首府又ハベルリシ府ノ治安裁判所ノ代リニ其

治安裁判所ノ在ル区ノ始審裁判所ニ屬セシムルナリ

〔丙〕然レ氏又帝國官吏條例第二十二條ニハ官吏ノ勤仕上ノ住所〔第二十条〕帝國領事裁判廳ヲ設立シアル邦國ニ在ル時ハ上未ノ規則ニ依テ千八百六十七年十一月八日頒布ノ法律ニ准シ官吏ハ領事裁判廳ノ管轄ニ屬スヘキコトヲ取消サ、ル可レ云、
 本法第二十四條ハ後年帝國法律ニ採用セラレ附録トシテ印刷セラレアル千八百六十五年六月二十九日ノ字漏生國領事裁判權ニ関スル法例ヲ參照トシテ指示セリ

若し起訴ヒントスル時ハ本法第三十五条
依り領事裁判廳ニ起訴スルモ本國ノ管轄裁
判所ニ出訴スル氏原告ノ選定ニ任カス
治外法權ヲ享有スル帝國官吏ハ通例外國即
チ独乙國外ニ勤仕上ノ住所ヲ有スヘキカ故
ニ其外國ニ住所ヲ有スル点ノミニシテ既ニ
本条及第二十一条ニ屬ス若シ其他ノ場合ハ
ル時ニハ本条ニ依り其裁判管轄ヲ定メサル
ヘカラス

〔第三解独乙各聯邦ノ官吏〕 聯邦官吏ニシテ
ベルリン府ニ開場スル集議院ノ議員ハ其亭
漏生國ヨリ出場スル者ヲ除キ〔裁判所編制法

ノ原第六条乃至第九条現今ノ第十八条乃至
第二十一条ニ對スル説明及ヒ帝國官吏条例
第二十一条第二十条ニ對スル説明ヲ參考
スヘシ〔帝國憲法第十条ニ依り治外法權ヲ享
受ス又當時尙ホ現行セラレタル各聯邦中互
ニ其朝廷ニ差遣シ又ハ外國ニ駐紮セシメ
ル公使モ亦同シ聯邦ノ官吏ニシテ独乙國外
滞在奉職スル鐵道局官吏ノ如キ者モ亦同シ
独乙國內外候ニ外國駐紮ノ他ノ官吏ニ付テ
ハ上ノ第二解ノ(乙)(丙)二号ノ理由ニ從フ
〔第四解外國〕 治外法權ハ各開明國民ニ於テ
之ヲ認可シアリ之ニ及シ他ノ種族ノ官吏ニ

付テハ國約又ハ法律ヲ以テ其滞在スル外國
 住所ノ裁判權ニ服從スヘキ旨ヲ規定スルコ
 ト往々アリ而是レニ對シテハ本條及ヒ第二
 十一條ニ依テ更ニ變更セシメザルヘシ
 〔第五解 治外法權〕 裁判所編制法第十八條乃
 至第二十一條ハ亦治外法權ニ関スル條ニシ
 テ即ケル權ヲ享有スル独乙人及ヒ外國人ノ
 住居スル國家ノ裁判權ノ免除ヲ規定セリ之
 ニ及シ本條ハ同法ノ規定ヨリ必要タルニ至
 レル所ノ独乙ノ治外法權者ニ對スル普通裁
 判管轄ニ付テノ規則ヲ定ルナリ而何人ニシ
 テ治外法權ノ權ヲ享受スル者ナル乎ハ裁判

所編制法原按第六條乃至第九條即現今第十
 八條乃至第二十一條ニ對スル說明ニ明カナ
 リ即曰凡ソ外交官吏ノ資格アル人ニ治外法
 權ノ權理ヲ享受セシムルハ國際公法上確定
 シアルナリ而全權大使全權公使亦理公使代
 理公使公使館書記官又ハ附屬員等無數ノ官
 名又一ニ枚举スルノ煩ヲ努トメテ省カシカ
 為メ法律ノ明文ニハ「帝國」又ハ「聯邦」駐劄ス
 ル使節ノ長官及ヒ屬僚ト記スヘシ
 而裁判所編制法第十八條ニ於テハ現ニ外交
 使臣ニ屬シアルモ其駐劄國ノ臣民籍ノ者ヲ
 除キアリ但し其產地カ裁判管轄ヨリ脱高セシ

メタル場合ニ限り治外法権ノ特權ヲ享受シ得ヘシ

又裁判所編制法第十九条ハ治外法権ノ推理ヲ擴メテ其家族使役人及ヒ独シ人ニ非ラサル從僕ニエテ及ホシ又全法第十九条ハ本法第二十五条ニ於テ特別例ヲ示ス所ニ限り治外法権者ニ對スル不動産ノ裁判權ニ付テ規定スルナリ

〔第六條 領事官〕 後年帝國法律ニ採用セラレ

タル千八百六十七年十一月八日領布ノ北部独乙聯邦法律ニ依リハ領事ヲ分ツテ二類トナシ即ケ其第七條ニ於ケル任命領事及ヒ第

九條ニ於ケル公選領事ノ二是レナリ而特リ任命領事ハ外交官ノ資質ヲ有ス故ニ公選領事ハ本條及ヒ帝國官吏條例ニ依リ裁判管轄ノ通則ニ從ハサルハカラス是ニ於テ予右ノ特例ヲ示シタル規則ニハ取除キアルナリ裁判所編制法第二十一条ハ更ニ一步ヲ進メテ独乙國內ニ駐紮スル領事ハ帝國ト外國ト是レカ及對ノ契約ヲ締結シアラサル限リハ内國ノ裁判權ニ服從スルモノト規定シタリ又任命領事ノ独乙國ニ駐紮スル數ハ甚メ少數ナリトモ己ニライパケレ一市ニモ四人アリ而其裁判權免除ノ國約ヲ明奉告示スル

ハ即ケ告達規定ニ属スルモノナリ
〔第七解独乙國陸軍及ヒ海軍ノ軍吏〕陸海軍
ノ軍吏ハ即ケ帝國軍部刑法ノ附録ニ記載ア
リテ而帝國官吏條例第一条ノ精神ニ依リ帝
國官吏ニ属セシム但聯邦軍備同盟上陸軍ニ
関レ特ニ議約シアルモノハ其限外ナリ〔帝國
憲法第十一章ヲ参照スヘシ〕独リ卒ユルノ位
置一者即ケ兵卒ハ帝國官吏條例第五十七
条ニ依リ只ク第百二十四条乃至第百四十八
条ニ適合スル者ナル限りハ官吏外ノモノト
ナスナリ
是等ノ帝國官吏ニ對シテハ即ケ帝國官吏条

例第二十一条乃至第二十二条供ニ本条ヲ適
用スヘキナリ而官吏ニシテ且軍人ナルカ故
ニ復ク亦法第十四条第十五条及ヒ帝國軍部
法例第三十八条第三十九条〔右二条ニ對スル
第二解第三解ヲ参照スヘシ〕ヲモ供セテ適用
セサルヘカラス然ルニ是カ為ノ本法第十五
条及ヒ帝國軍部法例第三十九条第三項ニ関
シテハ輒ケ混雜ヲ生ズヘシ何ントナレハ則
ケ本条及ヒ帝國官吏條例第二十一条ニ依リ
ハ内國ノ最終ノ屯營不在地ヲ住所トシテ其
住所ノ裁判所ノ管轄ニ属スルモノト解セツ
ルヘカラス又戦備戒嚴ノ場合ニ在テハ〔帝國

軍部刑法第百六十四條ヲ参照スヘシ一本法第
十四條及ヒ第十五條ニ對スル第二解ニ於テ
叙述セラル理由ニ因レテ本條及ヒ帝國官吏條
例第二十一條ヨリ之ヲ取除キテ而テ帝國軍
部法例第三十九條第三項ノ特別法ニ扱フサ
ルヘカラサシハナリ即ケ戰備戒嚴ニ在ル陸
軍ニ隊又ハ戰備儀裝ノ帝國海軍ノ軍吏ハ各
聯邦法又其都度特ニ告示セララル、裁判管轄
ニ付テノ法律ニ從テ軍部裁判部若シハ或ハ
内國ノ裁判所ニ屬マサルヘカラサルナリ
蓋軍吏ニ付テ是ノ如ク複雑ノ規定ヲ立テア
ランヨリハ寧ロ於新定訴訟法ニ於テ確然之

ラ一定スルハ實ニ希望ニ堪ヘサル所ナリ
〔第八解帝國官吏ヲ對スル特別裁判管轄〕帝
國官吏條例第百五十四條ヲ按ズルニ即曰
財產權ニ関スル事件ニシテ帝國官吏ニ係
リ其職權ノ濫用又ハ責任ニ反シテ職務ヲ
怠慢セラルニ原因スル訴訟ヲ提起スル時ハ
官吏カ其所為ヲ行フノ當時ニ有セル住所
ノ管轄裁判所又ハ起訴ノ時適ニ住所ヲ有
セル地ノ管轄裁判所ニ起訴スルヲ得
トアルニ依レハ則ケ官吏ノ為スヘカラサル
所為一本法第三十二條ヲ参照スヘシニ原因ス
ル訴訟ノ提起ニ付テハ特別ノ裁判管轄ヲ允

ルシ其行為ノ時ノ住所又ハ起訴ノ時ノ住所
ニ就テ其一ヲ選定セシメ「本法第三十二條ヲ
參照スヘシ」以テ裁判管轄ト為レ得ルナリ然
レ氏是レ還タ本法第三十二條ト相抵触スル
ヲ免カレサルノ場合アリ例ヘハ上等郵便局
官吏ノ如キ帝國官吏ニシテ其勤仕上ノ地且
數多ニ亘リアル者ニシテ而テ法律上許ルス
可ラサル行為ハ必スシモ其住所地外ト雖モ
為レ得ヘキ場合ノ類トス此場合ニ方テハ即
チ本法第三十二條ニ依リ其行為ノ地ノ管轄
裁判所ニ起訴スヘク其住所地ノ管轄裁判所
ニハ屬セシメサルナリ

而是ノ如キ訴訟ハ亦起訴ノ時ノ住所ノ管轄
裁判所ニ提起シテ妨ケサル所ハ即チ本法第
十三條依ニ第三十五條ニ依テ見ハハシ
帝國官吏條例第百五十四條ノ少ク訴訟法ト
相異トナル所アルモノハ之ヲ特別法トシテ
尚ホ実行セラル、ナリ
又裁判所編制法第七十條(二)ニ依レハ是ノ官
吏ニ係ルノ訴訟ハ其訴訟物件ノ價額ニ拘ラ
ズ特ニ始審裁判所ノ權限ニ專屬セシメアル
ナリ

第十七條 [普通裁判管轄] (丁) 配偶婦及ニ見孫

配偶婦ノ裁判管轄ニ付テハ永ク其配偶夫ト獲
食知シ分離シアラサル時ハ配偶夫ノ裁判管轄
ヲ以テ配偶婦ノ裁判管轄ト認定ス
正婚上又ハ是ニ等シキ所生ノ見ノ裁判管轄ニ
付テハ其父ノ裁判管轄ニ從ヒ又私生ノ見ニ付
テハ其母ノ裁判管轄ニ從フ但私生ノ見法律ニ
過スル効カラ以テ其住所ヲ變スルマテハ母ノ
住所ニ從フモノトス

〔判定ノ沿革〕 本条ニ関スル北部独ニ聯邦ノ
草案ニ付テハ次ノ第一解ヲ参照スハレ共他
ノ各草案ハ委ク相符合ス而本条ハ國議院委

員会ニ於テ異議ナク採用セラレケリ

〔第一解理由ノ説明〕 本条ハ即ケ他人ノ裁判

管轄ニ從屬セサルハカラサル輩ニ関シテ其

管轄ヲ規定セル所ナリ然リ而次ノ第十八条

ヲ本条ノ下ニ置キタルニ因レハ則ク是ノ如

キ從屬ノ裁判管轄ハ必ス其配偶夫又ハ母

ノ住所ニ依テ定メラレ而若シ配偶夫父母ニ

シテ現ニ住所ヲ有セサル場合ニハ從屬ノ裁

判管轄ハ從テ之レアリ能ハサルモノト解釈

スヘシ然リ而亦本法第十四条乃至第十六条

ハ從屬ノ裁判管轄ニ對スルモ尚ホ適用スヘ

キナリ是等ノ疑義ヲ避ケシメンカ為ノ右ノ

三條ヲ本條ノ上ニ置キタリ

從屬ノ裁判管轄ニ從フヘキモノニシテ即ケ

〔甲〕配偶婦ハ配偶中民法上獨立ノ住所ヲ有シ

得ルモノト雖氏尚ホ配偶夫ノ裁判管轄ヲ以

テ其裁判管轄ト認定ス故ニ配偶夫ノ裁判管

轄ノ現在スル限リハ配偶婦ハ普通裁判管轄

ノ規則ニ依リ配偶婦ノ住所ニ依ラスレテ必

ス配偶夫ノ住所ニ從屬セサルヘカラス

配偶夫死亡スルカ又ハ離婚スルカニ因シテ

結婚ノ關係ヲ絶ツニ至テハ則ケ即ケ從屬ノ

裁判管轄茲ニ滅絶ス而本條ニ於テハ離婚暫ト

永ク寢食所ヲ分離スルモノトヲ同等ニ見做

シアルナリ配偶夫其住所ヲ有セサル時又ハ

之ヲ有セサル間ハ其配偶婦ノ裁判管轄上ノ

關係ニ付テハ之ヲ獨立ノ一個人ト見做シテ

以テ其裁判管轄ハ自立ノモノトシテ本法第

十三條及ヒ第十八條ノ普通裁判管轄ヲ定ム

ルニ付テハ規則ニ從ハレム而配偶夫新ニ住

所ヲ定メ得ルニ至リタル時ハ即ケ其配偶婦

ハ再ヒ從屬ノ裁判管轄ニ復スルナリ加之北

部独乙聯邦草案第二項ニハ左ノ規則ヲ示シ

アリ即曰

配偶婦其配偶夫ニ委棄セラレ且其配偶夫
内地ニ住所ヲ有セサル者ナル時ハ配偶婦

ノ從屬ノ裁判管轄ハ消滅スヘシ
 ウイルテムベルグ國訴訟法第三十三條ノ(一)併
 ニ字漏生國草按第七條第二項第三項ニモ亦
 之ヲ明示ス然リト虽凡抑女ノ如キ特別ノ法
 律ハ其法律案ヲ起稿シテ特別裁判管轄ニ付
 テノ規則ヲ設ルニ方テハ敢テ實際上ニ必須
 ナル法律トハ認メサルノシナラス尚ホ配偶
 婦カ現ニ別居スル自立ノ住所ヲ有スル權理
 ヲ生スヘキ莫実ノ原由ヲ確定セントスルニ
 ハ頗ル困難ニテ其之ヲ確定セントスルハ正
 々不足ノ方法ニ出ルノ惧アルヲ以テ益々特
 例法ヲ採ラサルヲ善トスルカ如シ況ンヤ配

偶夫カ其配偶婦ヲ委棄シタルノ義ヲ以テ不
 當トスル裁判ノ論宗トナス以上ハ北部独
 聯邦草按ニ必要セル等二段、其配偶夫内地
 ニ住所ヲ有セサル者トノ趣旨ハ即ケ本法第
 十三條ニ揭示セル一般ノ原則ニ相抵触スル
 所之レアルニ於テオマ

(乙)住所ニ因テ定ル父ノ普通裁判管轄ハ正婚
 上又ハ是レニ等シキ所生ノ見、普通裁判管
 轄ト認定シ其私生ノ見ニ付テハ母ノ住所ヲ
 以テ之ヲ定ム而本條第二項ニ依レハ私生ノ
 見法律上有効ノ方法ヲ以テ母ノ住所ヲ脱ス
 ルコトハ母ノ裁判管轄ニ從フノ義ナリ即ケ

私生ノ見丁年ニ達スルノ后又ハ後見人ノ定
リタル后又ハ父ノ承認ヲ受ケタル以上有効
ノ方法ヲ以テ母ノ住所ヲ脱シタルナリ但父
若クハ母カ単ニ住所ヲ廢停セシメタルニ因
テ見ノ裁判管轄ニ害ヲ及ホサルヘシ
而後見人又ハ管理人ノ監督ヲ被ル輩ノ普通
裁判管轄ニ其後見ヲ為ス官廳所在地ヲ以テ
定ムルノ一夏ハ「北部独乙聯邦草按第五十二
条字漏生國草按第十條」逐ニ之ヲ規定セシ
テ止メリ然レ氏實際起訴者ニハ幾ント聞知
シ唯キ者ノ裁判管轄ニ付テ之ヲ規定セサル
ヘカラサルノ必要ハ之レアラズ亦後見權ヲ

顧テ以テ被後見人ヲ代理スル推理ノ重大ヲ
シテ後見ヲ為ス官廳ノ職權中ニ存セシムヘ
ク趣旨ヲモ注意シタルナリ

「第二解配偶婦」配偶婦トハ其自國ノ法律ニ

適シタル結婚ヲ為シタル婦人ハ其配偶夫ノ
死去スルマテ其關係ノ離別ニ因リ若クハ終
生同寢食所ヲ相分高スルニ因テ消滅セタル
限リハ即ケ配偶夫ノ住所ヲ保有スルナリ実
ハ向來独乙國ニ於テハ終生同寢食所ヲ同ノ
マサル如キ特異ナル事例ハ遂ニ其迹ヲ歛ム
ルニ至ルヘシト呈モ「市民籍ノ証明及ヒ結婚
ニ関スル帝國法例第七十七條」ヲ參照スヘシ

而カモ當時ハ尚ホ現ニ之レアリシノミナラ
ス又独乙國ニ住居スル外國ハ配偶婦ニ向テ
要トスヘキニ由テ本条ニ之ヲ明示シアルナ
リ
配偶夫独乙國ノ内外ヲ問ハス住所ヲ定メ有
スル時又ハ之ヲ有スル間其配偶婦ハ裁判管
轄ノ為メ他ノ住所ヲ有スルヲ得サルナリ例
ハハ一婦人有り独乙國ベルリン府ニ於テ自
ラ時好品ノ販賣ヲ營業スルトモ其裁判管
轄ヲ定ムヘキ住所ニ付テハ法朗西國パリス
府ニ在住スル配偶夫ニ從屬ニサルヘカラサ
ルノミナラス其配偶夫ノ兼諾ヲ得スレテ

ベルリン府ニ裁判管轄ノ住所ヲ新定シ能ハ
サルナリ而モ趣旨ト相符合スル法朗西民法
第廿八条ノ規則ニ於テ石ニ及スル場合ヲ大
ニ制限シアリト虽モ又本法第廿一条以下
ヲ以テ酌量シテ稍々相容ル、所之レアリ
若シ配偶夫更ニ住所ヲ有セサル時其配偶婦
ノ住所ニ関レテハ通則ニ從フヘキナリ然ル
ニ本按ノ説明ニハ更ニ一步ヲ進メ是ノ如キ
配偶婦ヲ独立ノ一個人ト見做レ独立ノ住所
ヲ完有スルモノト解釈セリ必竟本法第十二
条ニハ住所ヲ定メ得タルノ資質如何ニ付テ
ハ確定シアラララルヲ以テ其法律ニハ其旨趣

ヲ明言セスト虽モ本法第五十一条第二項ニ
參的シテ推定シ得ヘシ何ントナレハ配偶婦
ニシテ訴訟能力アルキハ又裁判管轄ノ為メ
住所ヲ定メ得ヘケレハナリ

〔第三解見孫〕如何ナル所生ノ見ヲ指シテ正
婚上所生ノ見ニ等シキ事ハ且ク國法民法ニ從
ハサルハカラス通則ハ承認上ノ見及ヒ養子
ノ二是ナリ〔ナツシセ〕國民法第四百七十条
第四百七十一条ヲ參考スヘシハノール
國ノ法律第四百七十条ハ復々別ニ父タルノ全權ヲ
以テセサルヲ養育スル見ヲモ加ヘアルナリ
又ライオン州ニ実行スル法朗西法ノ養子〔法朗

西民法第三百六十一条以下ハ配偶夫ノ權力
四ニ屬ス而法朗西民法第三百六十五条ハ裁
判管轄ニ付テ本法第二項ノ為メ制限ヒラル
ナリ

私生ノ兒ハ生母ノ住所ニ從フモノナルカ故
ニ單ニ其父カ已レノ見ナリト承認スルノ
ミニテハ更ニ其効カラ生セス又棄見ノ如ク
其母ノ不分明ナル者ニ對シテハ即チ本法ニ
於テハ幼年者ノ住所ニ付テ後見人ヲ立テ始
メテ之ヲ定メ得ル外ハ更ニ一定ノ規則ヲ
制定シラス蓋普通國法ノ現ニ其見ノ養育
ヲ被ムル養育院ヲ以テ見ノ住所ト定ムルノ

規則ヲ応用スルモ困トヨリ妨グサルナリ
法第二十一条ヲ參照スヘシ
正婚上ノ配偶夫又ハ私生兒ノ母一定ノ住所
ヲ有セサル場合ニ其幼見ハ父又ハ母ノ參助
ニ頼テ一定ノ住所ヲ有スルヲ得ヘシ若シ然
ル能ハサル時ハ還テ國法ニ從ハサルヘカラ
ス尚ホ本法第二十一条ヲ參照スヘシ
幼見法律上有効力ノ手續ヲ以テ其從屬ノ住
所ヲ廢マサル限ハ即ケ正婚ノ父又ハ私生ノ
母ノ住所ニ屬セサルヘカラス而其父又ハ生
母ノ死去後ト雖モ必ス継続シアルモノナリ
是趣義ハ第二讀会ニ於テ大賛成ニテ認許セ

ラレタリシ

「第四解被後見人」亦条ノ説明「上ノ第一解」ニ

於テ独ニ國內ノ法朗西民法現行ノ地ニハ其
第百八条ヲ以テ幼見ハ設ヒ其父母ノ存命中
ナリハ其後見人ノ住所ニ屬スヘシト規定シ
アルコトヲ脱遺シタリ
而テ幼年ニ關シテハ右ノ法朗西法ハ本法ノ
為メ排斥セララルヘシ即ケ亦条ハ法朗西民法
ト全ク相反シタル事漏生國普通法第二十条
ノ原則ニ本ツキタルナリ
既ニ丁年ニ達シタル後見解免者ニ關シテハ
即チ亦按説明中ニ普通國法ノ趣義ヲ取消ス

ヘキトヲ述ヘス又毫モ之ヲ企期スルノ意ヲ
見ルヘキモノナリ殊ニ法文上ニモ之ヲ明言
シアラサルナリ然リ而亦法第十三条第一解
ニ依リ國法ハ住所ノ得失ニ付テ判定シアル
モノナレハ乃ケテ年以上ニ且後見ヲ脱出し
タル者ノ住所ニ関シテモ亦國法ニ拠ルヘキ
ナリ

他行又ハ失踪セル後見人ニ関シテモ亦前項
ノ趣義ヲ適用ス「サフクセン 國第九百九十条
第九百九十五条ヲ參照スヘシ」
「第五解裁判管轄ノ認定」此認定ハ即ケ本条
ノ各二項ニ於テ只ニ裁判管轄ニ付テノ一認

定スルモノニシテ更ニ民法上ニ關係ヲ及ホ
サ、ル趣義ナリ必竟民法ニ於ケル住所ハ裁
判管轄ニ係ル理義トハ全ク相異トナル結果
ヲ為スノ場合ヲモ包含シアルナリ

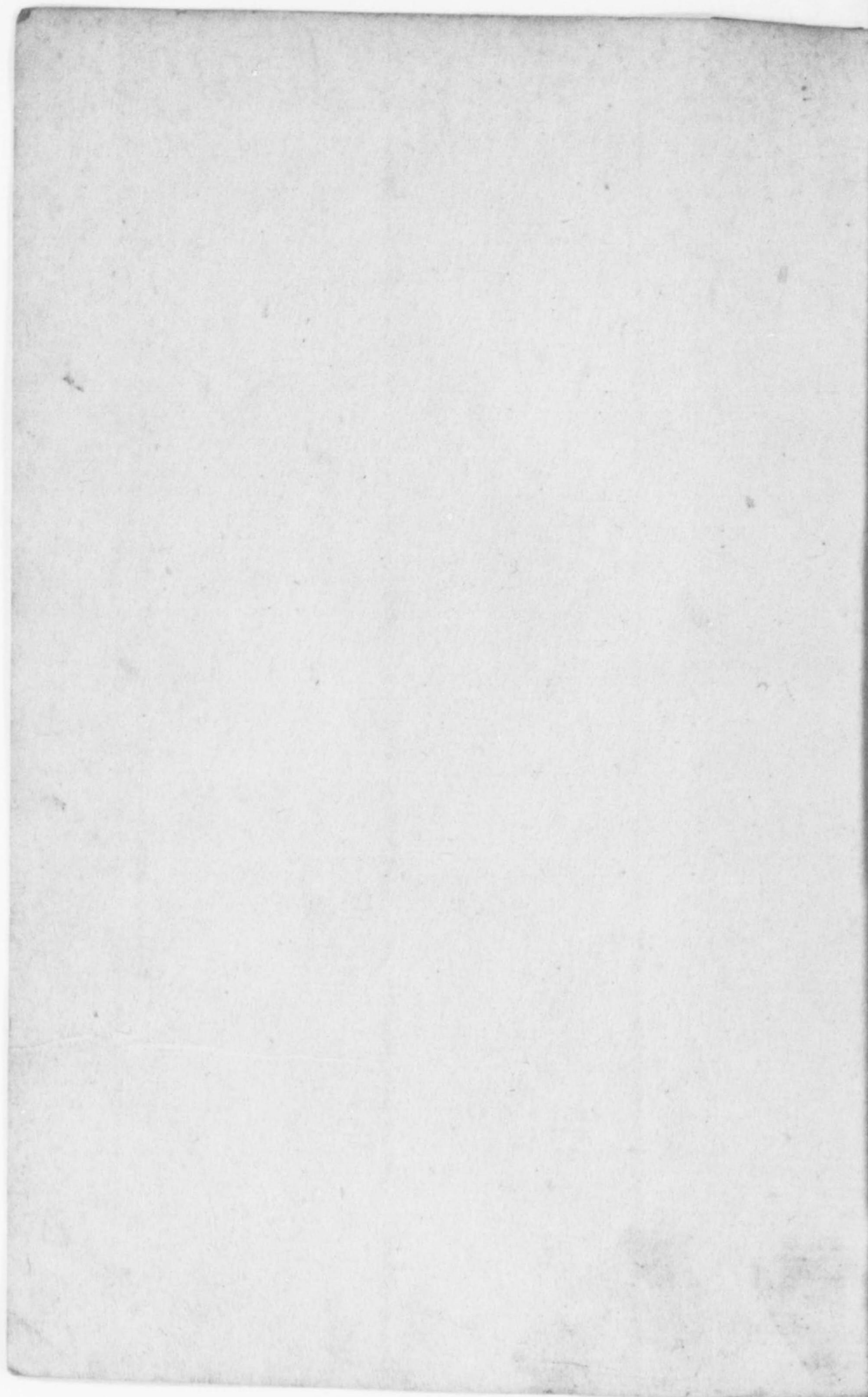
司法省文庫

第 2370 號

2370

司法省

司法省



2390

20
1
2